

1980年代半ば、カナダ北東のハドソン湾沿岸をボートで走っていると、ワモンアザラシ(以下、アザラシと略称)が近くをゆっくりと游泳している姿をよく見かけた。しかし、イヌイットのハンターは見向きもせず、捕ろうとしなかった。なぜ、目の前にいるアザラシを捕らないのかという疑問を持ちつつ、私ははじめて現地調査を開始した。

カナダの極北地域において寒さがピークに達した16世紀頃にイヌイットの主食は鯨肉から各地でとれるアザラシの肉へと変わった。彼らは、おもに春と冬にアザラシを捕獲し、生のままもしくは煮て食べることが多かった。アザラシの毛皮を得ていた。しかし、動物

## みんぱく 食の民族誌

## 考える舌

20

## イヌイットのアザラシ猟

岸上 伸啓



①カナダのケベック州で捕獲したアザラシの肉を分配するハンターたち(1999年、筆者撮影)②鍋で煮込まれたワモンアザラシの肉



## 80年代激減、主食から脱落

愛護運動の影響で84年にヨーロッパ共同体(EC)がアザラシの毛皮の輸入を全面的に禁止したため、ヨーロッパの毛皮市場が崩壊した。アザラシはイヌイットが寒冷環境の中で生きのびる上でもっとも重要な資源であった。

定住生活を開始した1960年頃から80年代半ばまでイヌイットは捕獲したアザラシの肉を食べ、その毛皮を売ることによって現金を得ていた。しかし、動物

## 健康促進分かり、回帰の動きも

頻度が激減した。その結果、村にもたらされるアザラシの量が減り、食糧不足を引き起こすこともあった。また、80年代にアザラシの体内からPCBやDDT、水銀などの汚染物質が発見されると、カナダ政府はその肉や脂身の消費を抑えるようになると警告した。さらに、温暖化の影響で寒冷気候に適応したアザラシの頭数が減少すると、それに比例して捕獲数も減少し、カナダ南部から搬送されてくる加工食品の消費量が増大した。このような経緯で、イヌイットはアザラシ猟を積極的に行わなくなり、アザラシ肉は実質的にイヌイットの主食ではなくなった。

しかし、イヌイットにとってアザラシ猟は、歴史的に見ると狩猟民族としてのアイデンティティーの源泉のひとつである。また、狩猟で得たアザラシ肉はハンターや、家族や親族、隣人の間で分配されるため、村内の社会関係の維持にも深く関係している。さらに、アザラシの肉や脂身の栄養価は加工食品よりも優れており、適度に摂取することは健康を維持促進させることも分かってきた。このため、現代のイヌイット社会では、アザラシ食を中心とした伝統食への回帰が叫ばれている。

(国立民族学博物館教授)  
次回は11月4日掲載の予定です。